

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成22年8月号

平成二十二年八月一日発行 第二十卷第八号  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可  
通巻第三三〇号(毎月一回一日発行)



模糊として

高橋将夫

平凡か非凡か曲がりたる胡瓜  
蒼天へ茂りの奥の大樹かな  
隙あらば流れんとする箱眼鏡  
屈玄と鍾馗の髯の端午かな

奥方に出さるるままに更衣  
父母若しお花畑で見る夢は  
極楽の砂はさらさら蟻地獄  
風鈴や地獄の釜は黄金色  
混沌を煎じてゐたる夏の夜  
大瀧の真下は模糊としてをりぬ  
欠くることなき阿字観の夏の月

# 槐安集

水野恒彦

麻蚊帳に昭和の闇は青かりき  
太宰忌の夕べは永く蟹赤し  
夏桜いま身に叶ふ淡さにて  
稿にいて吾を信じる燕の子  
月見しろじろと暮れ父の道

延広禎一

龍馬行く潮騒の朝羽蟻の夜  
後朝の火蛾の骸と折鶴と  
国盗りの城に出でける墓  
舍利舍利舎利鱧の骨切る世話女房  
葛ざくら大極殿に迦楼羅かな



加藤みき

大杉を伝ふ天水半夏生  
あらぬ方にえんどう豆が一つある  
松蝉や目の前にある潜水艦  
をりをりに生臭き風螢の夜  
おはやうの大きこゑなり朝ぐもり

石脇みはる

山の日が足元にあり花山葵  
をだまきや古人の黄の衣  
吉野川上築守帰るところかな  
滴りや木立の中の能舞台  
夏祭雲ふつつ切れし大櫓

中島陽華

惜春の富士の裾野のさくら棒  
朱けの橋かかりし山の忘れ霜  
黄道光やつとはんざき動きけり  
白南風に首尾よく乗りし放れ駒  
神化かな宝石箱のミニトマト

栗栖恵通子

湯かげんをみるに立夏の手首かな  
その上<sub>ミ</sub>に蝶の木ひとつ黄道光  
顔寄せて先師語らむ額の花  
口笛の子等につきゆく蚩かな  
まつすぐな櫛の目風の薫りける

竹内悦子

水流るるあたり八十八夜かな  
松の花いつぱい咲いて裏鬼門  
春蘭のうすみどりしてこの世かな  
孔雀さぼてん咲きし一日の暮れにけり  
臺交む天満宮の祝詞かな

大島翠木

ダム<sub>ノ</sub>吐く水太かりき虚子忌かな  
落ちて薄目の花沙羅森閑たる真昼  
小満の竹のざはめく塑像かな  
六連銭の旗たんぽぽやすかんぽや  
石臼をほつたらかして芒種かな

雨村敏子

引鴨に明るき空や多宝塔  
酢や杉も檜も瀧の音  
山藤の梢は空に溶け出して  
新緑や命のいろの音聞こゆ  
球体はいのちの形葱坊主

小形さとる

寝て食うて五柳先生畑を焼く  
遠謀のしばらく荻の角となり  
手を振つて春野を行けば済みにけり  
大南風獅子吼まことにのどかなる  
蓮華山蹠にて風薫るなり

本多俊子

大白の大きな影の端午かな  
母の帯身のきしむなり走馬灯  
なげきの火海に置いたる螢烏賊  
帰らざる音のありけり夏落葉  
太陽は母の光よ臺交む

久津見風牛

蝶二つ憂さはらすごとと気儘なる  
鱧ふかざめの菖蒲湯にをり顎あぎと上げ  
小女子こなご網曳き手にまざる己がぬて  
麦熟れて十萬億土つつがなし  
蓮糸の阿弥陀をつむぎ掲げをり

近藤 きくえ

わら天神白き産衣に緑さす  
大いなる老木つつむ夏の星  
庭下駄の湿つてゐたる佛法僧  
背よりやさしき言葉花槐  
青葉潮羽根うちふるふ孔雀かな

近藤 喜子

水の辺の一行詩なり糸とんぼ  
祈りつつ開く泰山木の花  
未完なる若葉の青さやはらかし  
ぼうたんや美しきもの見る二つの目  
かたはらに妣の来てゐる新茶かな

谷村 幸子

白牡丹にかこまれゐたる持国天  
波静か海を見下ろし粽食ぶ  
鼻の声和尚法話の途中なり  
見上げたる三輪の神杉五月晴  
はればれと子安地藏に藤の花

瀬川 公馨

双腕に四月抱きてホームラン  
春女苑どうせ金釘流ざんしよ  
卯月野の満艦飾に溺れたる  
カツポレカツポレ風を頬張る鯉幟  
玉珧を炙れ炙れと囃したる

久保東海司

双つ蝶やがて卍と舞ひにけり  
廻廊の寺苑の牡丹百程に  
夕螢ところかまはず出でにけり  
巡拝や菜の花満つる土佐にをり  
日盛りや猫の胎児も喘ぎをり

松原仲子

草に木に空のやさしき更衣  
暮れてゆく狐の提燈恋人来  
風なくて揺れしものあり夏の色  
有明の夢に父ゐる青葉潮  
かわらけの深谿に消え蟻地獄





# 槐市集

杉原ツタ子

あづまやの席の空かずや夕牡丹  
桐咲くや千手観音守りとす  
藤棚の風に迷ひし女かな  
母の日の大楠に頬つけてをり  
先がけの勿忘草や一筆箋

鈴木勢津子

ケロケロと田は歌うなり卯の花くたし  
舟の五色向き変へてゐる青葉潮  
新緑の中の頤白楽天  
桐の花見あぐ頂ニューターウン  
人知れず孟宗竹は皮を脱ぐ

十川たかし

手に触れて姫小判草くすぐつた  
朝方の夢まだ残る走り梅雨  
ででむしの殻の冷たき真昼どき  
カラー咲くセーラー服の通学路  
葉桜や何もなくなる身のまはり

谷岡尚美

入学式期するものあり熱唱す  
スイートピー小さき指で弾くピアノ  
島影に潮満ちくるや初鯉  
青磁色して絵手紙のはじき豆  
けふ穀雨あまねく享くる大八州



# 槐集

## 高橋将夫選

夏の扉を開ければ青と黄と白と  
安城 近藤 公子

少年の声のゆき交ふ夜の新樹  
罪かぶり真つ赤となりし金魚かな  
右耳にブルース左手に枇杷の実  
脱皮せし少女遠泳はじめたる  
石油缶に生きて騒ぞあぎて蝦蛄売られ

守口 柳川 晋

赤鱗も騙す 因幡の白兔  
渦潮を造る男に観る女  
華嚴的インドの先の大西日  
舳へ乗りして峰なす雲に目を据うる  
南山の麓に在りて豆を植う  
鹿の子の斑の腹の波打てり  
薫風の金毛閣を通りけり  
大絵馬の馬の抜け出す臯月かな  
ビル街のなんじゃもんじゃの花の照り

岩下 芳子

百合満開ルイ王朝の姿かな  
岡崎 岩月優美子

新緑や心の波形おだやかに  
竹皮を脱ぐ青雲の見ゆるまで  
蛸泳ぐときには見せしブルカの眼  
浜昼顔夢は追ふもの掴むもの  
ゴムまりの指はねかへす夏来たる

枚方 中野 京子

花のあとまはりの木々に染まりける  
シナリオの修正ばかり花は葉に  
玉ねぎの皮むきながら断念す  
かたまりの雨降る朱夏の阿修羅像  
水無月や胸につかへるものありて  
身の内の刺の融けゆく遍路かな  
地を這うて餓鬼が来るなり片陰り  
月朧隠しおほせぬ 女紋  
丑満の風の声聞く利休の忌

寢屋川 前田美恵子

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

夏の扉を開ければ青と黄と白と 近藤 公子  
扉を開けたら夏の景色が広がっている。それを青、黄、白の色でストレートに捉えた感性に共鳴。青空とまぶしい光とゴッホの黄色に目がくらむ。〈脱皮せし少女遠泳はじめたる 公子〉や〈右耳にブルース左手に枇杷の実 公子〉もユニーク。

石油缶に生きて騒さわぎて蝦蛄売られ 柳川 晋  
石油缶の中で必死に生きようともがいている蝦蛄。やれ石油だ、やれクリーンエネルギーだと狭い地球で足掻いている世相が見えるようで面白い。〈渦潮を造る男に観る女 晋〉の皮肉や〈舳乗りして峰なす雲に目を据うる 晋〉の男気も捨てがたい。

南山の麓に在りて豆を植う 岩下 芳子  
比叡山を北山と呼ぶのに対して、高野山を南山という。偉大な弘法大師のもとで、豆を植えて日を過ごす素朴さに共感。悟りの世界かもしれない。〈大絵馬の馬の抜け出す皁月かな 芳子〉にも、どこかのどかさがある。

竹皮を脱ぐ青雲のみゆるまで 岩月優美子  
青雲が見えるほどまで、一皮も二皮も脱ぎたいという竹の心意気に感じた。ただの青空ではない。星雲の志なのだ。

玉ねぎの皮むきながら断念す 中野 京子  
玉ねぎの皮を剥きながら、何かを断念したという。何を断念し

たかは言っていないが、なるほど、玉ねぎを剥く所作を想像すると、なにかを断念したくなる気持もわかりそうな気がする。〈ゴムまりの指はねかへす夏来たる 京子〉は素直で、好感のもてる一句。

月朧隠しおほせぬ女紋 前田美恵子  
紋付を着た女性が歩いていく月の道。なんとも風情のある景である。朧月でも女紋だけははっきり見えているという。隠し切れないのは女の性と言ったら言いすぎだろうか。ちなみに家紋（男紋）には太い丸があり、女紋にはないのが一般的とも言いが、どうも明確な区別はないらし。

蔦芽吹く地上もつとも沸き立てり 富松 寛子  
草木の芽吹く春の情景が「地上：沸き立てり」と見事に表現されている。心まで沸き立つようだ。

カモミール二人の午後を明るうす 近藤 紀子  
カモミールはキク科の多年草で、全体に芳香がある。花は胃腸薬、発汗剤。乾燥した花を茶のようにして飲む。幸せなお二人に乾杯。

夢はまた錬金術師臺のこゑ 西村 純太  
寝て見る夢も覚めて見る夢も、夢はいろいろなものを生み出してくれる。そういう意味では錬金術かもしれない。錬金術では金を作れなかったが、いろんな金属の発見に繋がった。臺の声がいかに妖しげ。(以下略)